

# Chaucer の *The Physician's Tale*

## における語りについて

柴 田 竹 夫

### On the Narrative of Chaucer's *Physician's Tale*

Takeo Shibata

#### 要 旨：

チョーサー (Geoffrey Chaucer, 1340?-1400) の *The Physician's Tale* (「医者の話」) における語り手の語りについて検討する。語り手の語りによるしめくくりの罪についての “sentence” は、美貌と美德の幼き Virginia と立派な騎士である父 Virginius にまつわる、pathos を基底とする語りとの間に、ある種の矛盾、不調和を呈している。この矛盾、不調和を通して、現実的指向を持つ世俗的な語り手の姿が浮かび上がってくる。

#### キーワード：

- 1 . Geoffrey Chaucer
- 2 . The Physician's Tale
- 3 . The narrative
- 4 . Virginia
- 5 . Medieval English Literature

1

*The Physician's Tale*<sup>(1)</sup> (「医者の話」) (以下 PhsT と記す) の語り手 (The Physician) が、「罪」を捨てよとの教訓 (“sentence”) でもって、語り終えると、宿の亭主 (The Host) Harry Bailly はこう言う。

Hire beautee was hire deth, I dar wel sayn.

Allas, so *pitously* as she was slayn!

(VI [C], 297-8) (my italics)

騎士ヴィルジニウス (Virginius) の一人娘, うら若き乙女ヴィルジニア (Virginia) は, 類まれな美貌ゆえに, 哀れで酷い死を遂げねばならず, 宿の亭主のみならず, 聴衆 (読者) もこの哀れな娘の死を悼み, 哀れさをもって聴き終えたに違いない。ところが PhsT が pathos の話であることと, 語り手の「罪」の “sentence” との間には, ある種の矛盾, 不調和が見られる。本稿では, この矛盾, 不調和を通して PhsT における「語り」(narrative) について検討してみたい。

## 2

PhsT のはじめ, 8~117 行は, チョーサー (Geoffrey Chaucer, 1340?-1400) による原典への付加の箇所である。そしてこの箇所において, 彼女の類まれな肉体の美しさ (9-38), 彼女の美德 (38-58) そして君主の子女の女家庭教師 (“maistresses”) 及び親による子供に対する監督 (“governaunce”) 責任, これら 3 つのことが, ヴィルジニアを語る上で付加されている。まずチョーサーによるこの付加の箇所におけるヴィルジニアの描写を吟味することから始めたい。

語り手は, ヴィルジニアの美貌と自然の女神 (Nature) との関係を語り始める。

For Nature hath with sovereyn diligence  
Yformed hire in so greet excellence,  
As though she wolde seyn, “Lo! I, Nature,  
Thus kan I forme and peynte a creature,

Whan that me list; who kan me countrefete?  
Pigmalion noight, though he ay forge and bete,  
Or grave, or peynte; for I dar wel seyn  
Apelles, Zanzis, sholde werche in veyn  
Outher to grave, or peynte, or forge, or bete,  
If they presumed me to countrefete.  
For He that is the formere principal  
Hath maked me his vicaire general,  
To forme and peynten erthely creaturis  
Right as me list, and ech thyng in my cure is  
Under the moone, that may wane and waxe,  
And for my werk right no thyng wol I axe;  
My lord and I been ful of oon accord.  
I made hire to the worshipe of my lord;  
So do I alle myne othere creatures,  
What colour that they han or what figures.”  
Thus semeth me that Nature wolde seye.

(VI [C], 9-29)

ヴァージニアの美貌の姿は、自然の女神が最大の努力をもって作った、自然の女神は、神の代理人として好むがままに地上の創造物を形造り、彩色するのであると言う。美貌の女性の創造者としての自然の女神は、女性の美貌を強調するための中世フランス詩におけるありふれた比喩の一つである。<sup>(2)</sup> 更に語り手は、ヴァージニアの造形は、神の御心にかない、神を崇めるためである (25-6) と、まるで自然の女神を代弁するかの様に言う。つまり自然の女神の創造物としての美貌のヴァージニアが、神意にかなったものであることを語り手は、強調している。

続いて 30～39 行において、語り手は、自然の女神も喜びを感じるほどの

(31) 14歳という幼なき乙女の年齢を言い、その美貌を讃美する。薔薇と百合の花に比べ (32-4), フィーバスを持ち出して (37-8) 髪が金髪であるとは、女性美の讃美の一つの定形であるが、語り手は、この「美貌」と彼女の持つ「美德」を次の様に直ちに結び付ける。

And if that excellent was hire beautee,  
A thousand foold moore vertuous was she.

(VI [C], 39-40)

類まれな美貌のさらに千倍という程の彼女の美德に対する讃美は、41行から71行にわたる。そして特に41~60行において、語り手は彼女の13の美德を列挙する。

In hire ne lakked no condicioun  
That is to preyse,as by discrecioun.  
As wel in goost as body chast was she,  
For which she floured in virginitee  
With alle humylitee and abstinence,  
With alle attemperaunce and pacience,  
With mesure eek of beryng and array.  
Discreet she was in answeyng alway;  
Though she were wis as Pallas, dar I seyn,  
Hir facound eek ful wommanly and pleyn,  
No countrefeted termes hadde she  
To seme wys, but after hir degree  
She spak, and alle hire wordes,moore and lesse,  
Sownynge in vertu and in gentillesse.  
Shamefast she was in maydens shamefastnesse,

Constant in herte, and evere in bisynesse  
To dryve hire out of ydel slogardye.  
Bacus hadde of hir mouth right no maistrie;  
For wyn and youthe dooth Venus encesse,  
As men in fyr wol casten oille or gresse.

(VI [C], 41-60)

ここで13の美德とは次の様なものである。<sup>(3)</sup>

chastity (43), humility (45), abstinence (45), temperance (46),  
patience (46), measure (47), discretion (48), wisdom (shown in  
speech) (49), modesty (“shamefastness”) (55), constancy (56), perse-  
verance (“ever in business”) (56), sobriety (58-9), innocence (present  
throughout by implication, and mentioned at 92)

この美德の最初に“chastity”（肉体的及び霊的純潔）（43）を語り手は、挙げて  
いることに注目したい。世俗の幼なき乙女ではあるが、彼女は言葉においても、  
行為においても美德や気高い優しさと結び付き、酒や若さが、ヴィーナスつま  
り性的放縦とつながることを認識し（59），“daliaunces”（66）（=amorous talk  
or to-do; flirting, coquetry; sexual union）（MED 3）の機会を与える宴会、  
酒盛り、舞踏会といった、愚行（64）を犯しそうな所から逃れて、意識的に、  
積極的に自らの chastity を、彼女は、守ろうとしている。

And of hir owene vertu, unconstreyned,  
She hath ful ofte tyme syk hire feyned,

(VI [C], 61-2)

しかし語り手は、子供であっても世俗の誘惑を受け，“To soone rype and

boold” (68) の可能性があると言って、次の様な世俗的な心配をする。

Which is ful perilous and hath been yoore.  
For al to soone may she lerne loore  
Of booldnesse, whan she woxen is a wyf.

(VI [C], 69–71)

否定的な意味を持つ既婚女性の大胆さ (“booldnesse”) (ここで the Wife Bath をおもい起こせばよい) を語り手は、乙女ヴィルジニアに持って欲しくないの  
である。つまり語り手による乙女の “chastity” の強調である。

語り手は、次に女家庭教師と親による娘に対する監督責任の問題に話をつな  
ぐ。

And ye maistresses, in youre olde lyf,  
That lordes doghtres han in *governaunce*,  
Ne taketh of my wordes no displesaunce.  
Thenketh that ye been set in *governynge*s  
Of lordes doghtres only for two thynges:  
Outher for ye han kept youre honestee,  
Or elles ye han fall in freletee,  
And knowen wel ynough the olde daunce,  
And han forsaken fully swich meschaunce  
For everemo; therefore, for Cristes sake,  
To teche hem vertu looke that ye ne slake.

(VI [C], 72–82) (my italics)

まず女家庭教師に対しこう訴える。キリストにかけて、美德を教えるに怠たり  
なきようにと、女家庭教師は、もともと “honestee” (77) (=chastity) (MED

4 [b]) を持つか、あるいは過去の経験から “olde daunce” (79) (=the whole business; all the tricks) (*MED* 4a) を知っている、つまり世故に長けているが、今では “frelete” (78) (=weakness, sinfulness) (*A Chaucer Glossary*) を捨てたがゆえに、美德 (“vertu”) (82) を教えられるのだと語り手は言う。女家庭教師は、生得の chastity を持つか、あるいは経験を通して chastity に至る認識を持つべきなのである。

続いて語り手は、次の様に注意を促す。

A thief of venysoun, that hath forlaft  
His likerousnesse and al his olde craft,  
Kan kepe a forest best of any man.  
Now kepeth wel, for if ye wole ye kan.  
Looke wel that ye unto no vice assente,  
Lest ye be dampned for youre wikke entente;  
For whoso dooth, a traitour is, certeyn.  
And taketh kep of that I shal seyn:  
Of alle tresons sovereyn pestilence  
Is whan a wight bitrayseth innocence.

(VI [C], 83-92)

ここであらゆる裏切りのうちで最も有害なものは、罪なき子 (“innocent”) を裏切ることとは、chastity の乙女が汚されることへの危惧であり、汚されることなきよう「監督」の義務の怠惰を強く戒める。83~85行の諺からも伺える様に、「経験」を通しての語り手の世俗的、現実的な「監督」という方法を、語り手は、訴える (86, 90)。

この注意の喚起において、87~88行、91~92行は、69~71行の “booldnesse” の危険性の教示とつながる。つまり語り手が、女家庭教師の「監督」責任を取り上げるのは、ヴィルジニアの “chastity” との繋がりにおいてである。

更に語り手は、次の様に親に対しても、子供に対する「監督」責任について注意を促す。

Ye fadres and ye moodres eek also,  
Though ye han children, be it oon or mo,  
Youre is the charge of al hir surveiaunce,  
Whil that they been under youre governaunce.  
Beth war, if by ensample of youre lyvyng,  
Or by youre necligence in chastisyng,  
That they ne perisse; for I dar wel seye  
If that they doon, ye shul it deere abeye.

(VI [C], 93-100)

子供を正すのを怠れば、子供は駄目になるし、高価な報いを受けることになるという語り手の、親に対する戒めは、親の子供に対する「監督」の重要性の意識の現れであり、当然ヴィルジニウスのヴィルジニアへの「監督」の重要性と繋がり持つ。

女家庭教師及び親への警告 (cf. 82, 87, 90, 97) の後、語り手は、次の様にヴィルジニアに話を戻す。

So kepte hirsself hir neded no maistresse,  
For in hir lyvyng maydens myghten rede,  
As in a book, every good word or dede  
That longeth to a mayden vertuous,  
She was so prudent and so bountevous.

(VI [C], 106-110)

ヴィルジニアは、“maistresse”の必要はなく (106)、毎日の生活の中で、“a



mayden vertuous” (109) にふさわしい「言葉」と「行為」を学ぶことができ、更に、彼女の美貌と美德ゆえに世の名声を勝ち得る。ヴィルジニアは、世俗に生きながら美德を守る乙女なのである。

語り手は、39～40行において、ヴィルジニアの美貌から美德へと話を繋ぎ、美德の中でもとりわけ“chastity”を言い、次に“chastity”を踏まえて、72行目より女家庭教師と親の「監督」責任に言及し、次いで105行目より、「監督」の必要もなく、世俗にあって「美德」を意識的に守ろうとする乙女の姿を語る。

### 3

次にその地の支配者、悪裁判官 (“false juge”) (154) アピウス (Apilus) のヴィルジニアに対する奸計について吟味する。

語り手は、118～202行において、アピウスが、いかに邪悪 (“false”) であるか、いかにヴィルジニアを奴隷 (“thral”) としようとしているかを語る。

ある日ヴィルジニアが、他の乙女もやる様に、母親と共に寺に御参りに行き、そこでたまたまアピウスに目を止められたのが事の発端である。好色なアピウスは、彼女の美貌に目を奪われ、我が物にしようと思う。

Anon his herte chaunged and his mood,  
So was he caught with beautee of this mayde,  
And to hymself ful pryvely he sayde,  
“This mayde shal be myn, for any man!”

(VI [C], 126-9)

その時アピウスの心には悪魔 (“feend”) (130) が入り込み、奸計 (“slyghte”) (131) によって彼女を手に入れることを、すぐ様 (“sodeynly”) (131) 彼に教えたと言ひ手は言う。“false” なアピウスは、この悪魔の奸計をただちに実行に移す。

アピウスは、腕づく (“force”) (133) でも賄賂 (“meede”) (133) でも成功しないと確信する。というのもヴィルジニアは、父同様 (cf.4) 有力な友人を持ち、善良で、肉体的に罪 (“synne”) (138)<sup>(4)</sup> を犯すはずもないからである。そこでアピウスは、熟慮の上、狡賢くて大胆な男を仲間に引き入れ、秘密裡に悪魔の奸計を話し、一切他言しないと誓わせ、その際他言したら、首が飛ぶと脅す。この邪悪な (“cursed”) 計画 (146) がまとまるとアピウスは、喜んでこの仲間に高価な贈り物をする。この様にアピウスは、この男クラウディウス (Claudius) を、脅しと賄賂により (ヴィルジニアが腕づくにも賄賂にも屈しない姿とは対照的) 巧みに仲間に引き入れる。二人は綿密に共同謀議をし、好色な行い (“lecherie”) (150) (cf. 205, 266) を巧妙に実行しようとする。それは裁判官の立場を利用して、みかけは合法的にヴィルジニアを奴隷 (“thral”) (183, 189, 202) にする悪計である。

ヴィルジニアの美貌の虜 (“thral”) <sup>とりこ</sup> となったアピウスは、クラウディウスの力を借りて、以下の様に奸計を遂行しようとする。まず自らの快樂を急ぎ遂げんとする。

This false juge gooth now *faste* aboute  
To *hasten* his delit al that he may.

(VI [C], 158-9) (my italics)

クラウディウスは、ヴィルジニウスに対する訴訟を起こさんと急ぎ法延に出る。

This false cherl cam forth *a ful greet pas*,

(VI [C], 164) (my italics)

またヴィルジニウスが、裁判官の意志を確かめにやって来ると、クラウディウスによる邪悪な請願をアピウスは、「ただちに」読み上げる。

And *right anon* was rad this cursed bille;

(VI [C], 176) (my italics)

またヴィルジニウスが、この請願を聞いた後、アピウスは、ヴィルジニウスから一言も聞こうとせずに、「ただちに」判決を下す。

Virginus gan upon the cherl biholde,  
But *hastily*, er he his tale tolde,  
And wolde have preeved it as sholde a knyght,  
And eek by witnessyng of many a wight,  
That al was fals that seyde his adversarie,  
This cursed juge wolde *no thyng tarie*,  
Ne heere a word moore of Virginus,  
But yaf his juggement, and seyde thus:

(VI [C], 191-8) (my italics)

次にアピウスは、ヴィルジニウスを捕えて、絞首刑を「ただちに」執行しようとする。

He bad to take hym and anhange hym *faste*;

(VI [C], 259) (my italics)

この様なアピウスが事を急いでなす姿は、悪魔がその奸計を「ただちに」(“sodeynly”) (131) 教唆したのと軌を一にしている。アピウスが false であることを何よりも裏付けている。

アピウスに対する “false” の epithet は、計 3 回 (159, 158, 161) (cf. “fals,” 195; “cursed,” 196; “falsly,” 228; “false iniquitee,” 262; “fals justice,” 289) 使われ、クラウディウスに対する “false” の epithet は、1 回 (164) (cf. “a fals

cherl,” 289) 使用されている。<sup>(5)</sup> また “false” の使われ方をみると、154, 158, 161, 164 行と 4 回畳み掛けて使用して、両者の false さを語り手は強調する。“false cherl” は、“false juge” に対し法廷で次の様な邪悪な請願をする。

“To yow, my lord, sire Apius so deere,  
Sheweth youre povre servant Claudius  
How that a knyght, called Virginius,  
Agayns the lawe, agayn al equitee,  
Holdeth, expres agayn the wyl of me,  
My servant, which that is my thral by right,  
Which fro myn hous was stole upon a nyght,  
Whil that she was ful yong; this wol I preeve  
By witesse, lord,so that it nat yow greeve.  
She nys his doghter nat, what so he seye.  
Wherefore to yow, my lord the juge, I preye,  
Yeld me my thral, if that it be youre wille.”  
Lo, this was al the sentence of his bille.

(VI [C], 178-90)

ヴィルジニアを訴える時のクラウデオウスの “Agayns the lawe, agayn al equitee (=law)” (181) という言葉は、自らにこそ向けられてしかるべきものである。ヴィルジニアを合法的に父親から取り上げて、自らの好色の犠牲 (cf. 150, 206, 266) にアピウスはしようとする。

ヴィルジニアは、false なアピウスとクラウディオウスの奸計にかかり、父ヴィルジニウスの「監督」の下から、アピウスの「奴隷」へと、裁判を通して、彼女の意志とは無関係に運ばれてゆく。

他方 “worthy” (203) な騎士ヴィルジニウスはと言えば、愛する娘 (“deere dighter”) (205) (ct. 208, 218, 237) を不正な判決により、力づくで (“by force”) (205) (cf. 133), 好色な裁判官に奪われ、娘を自らの手であやめる状況に追い込まれる。

アピウスの判決を家に持ち帰ったヴィルジニウスは、愛する娘を前にして、父親としての “pitee”<sup>(6)</sup> (211) を感じながら (娘は孤独ではない), 娘に自分の考えを告げる。

And with a face deed as asshe colde  
 Upon hir humble face he gan biholde,  
 With fadres pitee stikyng thurgh his herte,  
 Al wolde he from his purpos nat converte.

(VI [C], 209-12)

そしてまるで裁判官の様に彼女にこう宣告する。

“Doghter,” quod he, “Virginia, by thy name,  
 Ther been two weyes, outhere deeth or shame,  
 That thou most suffre; allas, that I was bore!  
 For nevere thou deservedest wherfore  
 To dyen with a swerd or with a knyf.  
 O deere doghter, endere of my lyf,  
 Which I have fostred up with swich plesaunce  
 That thou were nevere out of my remembraunce!  
 O doghter, which that art my laste wo,  
 And in my lyf my laste joye also,

O gemme of chastitee, in pacience  
Take thou thy deeth, for this is my sentence.  
For love, and nat for hate, thou most be deed;  
My pitous hand moot smyten of thyn heed.  
Allas, that evere Apius the say!  
Thus hath he falsly jugged the to-day”—

(VI [C], 213-28)

224～225行は、父の判決、宣告 (sentence) である。ここで父は、憐れみの心をこめて、娘に対し4回呼びかけ (213, 218, 222, 223), “deeth” か “shame” (214) のいずれかの道をとらねば (“suffre”) (214) ならぬことを告げる。この時の娘に対する父としての態度は、ただ愛する娘に対する憐れみの心 (“pitee”) にあふれたものである。彼女は死に値する人間ではないこと、大きな喜びをもって育ててきたこと、父の記憶から決して消えることがないこと、そして娘が “laste wo” であると同時に “laste joye” であることを娘に告げる。

“deeth” か “shame” の二者択一を迫る父は、娘にその選択をまかせることなく、父がその「監督」責任の下、娘に “deeth” を取るようにと、それが父の sentence だと逡巡することなく告げる (224)。

父は自分の娘に “pitee” をかけながらも、娘の首を自らの手ではねるという cruelty を見せる態度は、一見矛盾しているようにみえるが、“gemme of chastitee” (223) という娘への呼びかけや、父が娘にいう “For love, and nat for hate, thou most be deed” (225) という言葉や首をはねるに自らの “pitous hand” (226) (cf. 254) をもってするという父の言葉からは、cruel だが、娘の “chastity” を強く意識した父の姿がみえる。

ヴァージニア (Virginia) という名前そのものが、父が娘に呼びかける (213) 時に発せられる名前 (PhsT において一度だけ)<sup>(7)</sup> であるが、当然 chastity に結び付く重要な命名である。“Virginia” と呼びかけた後、父は娘に “deeth” か “shame” の二者択一を迫る。娘の意志を確認せずに chastity を失うよりは

“death”を選ぶという父としてのヴィルジニウスの宣告は、chastity という美德、名声、名誉を重んじるという彼の価値観の現れである。ヴィルジニアも (cf. 238-9, 248) ヴィルジニウスの命を助けた人々も (cf. 260-2) 同様の価値観を持つと考えられる。つまり Helen Cooper のいう “a shame culture”<sup>(8)</sup> に属するものの考え方である。

憐れみの心 (“fades pitee”) (211)、愛 (“love”) (225) を持ちながら cruelty を見せる父に対し、娘は、滂沱の涙を流しながら (234)、哀れみも救いもないのですかと父に問う。

“O mercy, deere fader!” quod this mayde,  
And with that word she bothe hir armes layde  
Aboute his nekke, as she was wont to do.  
The teeris bruste out of hir eyen two,  
And seyde, Goode fader, shal I dye?  
Is ther no grace, is ther no remedye?”

(VI [C], 231-6)

この時の父と娘の抱擁は、互いをおもいやる心の発露である。<sup>(9)</sup> 父を愛する娘は、父に “O mercy, deere fadre” (231), “Goode fader” (235) と呼びかけ、父を咎めることはない。

娘の父に対するこの問い掛けに対し、父は哀れみも救いもないと、ためらわずに宣告する。

“No, certes, deere doghter myn,”

(VI [C], 297)

それに対し娘は、父に次の様に願う。

“Thanne yif me leyser, fader myn,” quod she,  
“My deeth for to compleyne a litel space;  
For, pardee, Jepte yaf his doghter grace  
For to compleyne, er he hir slow, allas!  
And God it woot, no thyng was hir trespas,  
But for she ran hir fader first to see,  
To welcome hym with greet solempnitee.”

(VI [C], 238-44)

娘は、父の宣告を受け入れ、自らの死を嘆くための時間を請うのみである。

この時ヴィルジニアは、エフタ (Jepte) の名を持ち出すが、中世において、エフタは、その娘を殺害したことにより宗教的に批難されている。<sup>(10)</sup> 従ってヴィルジニアが嘆きの時間を請うにエフタの名を持ち出したことは、自らをエフタの娘になぞらえることにとどまらず、聴衆に対し、父ヴィルジニウスをエフタに結び付ける結果になるに違いなく、娘殺害の父としての cruelty と当然結び付く。

父より死を申し渡され、滂沱の涙を流すヴィルジニアの悲しみがいかに大きなものであるかは、彼女の二度にわたる「気絶」(“swownyng”) に端的に見られる。一つは、父に嘆きの時間を請う時である。<sup>(11)</sup>

And with that word she fil aswowne anon,

(VI [C], 245)

そしてヴィルジニアは、気がついた時、父にこう言う。

“Blissed be God that I shal dye a mayde!  
Yif me my deeth, er that I have a shame;  
Dooth with youre child youre wyl, a Goddes name!”



(VI [C], 248-50)

彼女は、神の名の下に (250) 父の意志を受け入れている。“shame” を受けるよりは処女のまま死ぬことを選ぶ覚悟を示している。

彼女の二度目の気絶は、首を打つに優しくしてほしいと父に願う時である。

And with that word she preyed hym ful ofte  
That with his swerd he wolde smyte soft;  
And with that word aswowne doun she fil.

(VI [C], 251-3)

ここで “with that word” — “with his swerd” — “with that word” の連鎖から、“that word” すなわち 248~250 行における彼女の固い決意 (処女としての死と父の意志の受け入れ) にもかかわらず、死 (“swerd”) を迎えねばならないことへの深い悲嘆が強く伝わってくる。

気絶するほどの深い悲しみを抱きながらも、乙女は父を受け入れ、アピウスの奴隷ではなく、父の監督の下における、つまり父同様 “shame” より “deeth” の価値観に基づいて、自らの「死」を受け入れる (受け入れたくはないが、受け入れざるをえないがゆえに) 忍耐を伴う受難の姿を見る。この様な滂沱の涙と気絶を伴う忍耐の受難の姿を見て、聴衆は、pathos を感じるに違いない。

207~253 行は、チャーサーによる改変の箇所であるが、原典と本質的に異なる点が二つある。原典では、乙女は、法廷において自らの判決を聞いた後、ただちに、公開において処刑されるのに対して、チャーサーでは、乙女は、家において、父よりアピウスの判決を聞き、父の手による死の執行を宣告され、死の準備の時間を与えられた上で、privately に殺害される。乙女の死が、判決後ただちであるか、時間を置いたものであるか、そして publicly か privately に死を迎えるか、この二点の相違が、ヴィルジニウスの死の意味を考える上で重

要な点である。<sup>(12)</sup>

それでは、この相違点から何が言えるか。チョーサーによるヴィルジニアの美貌と美德の付加と共に、この改変により、語り手は、“piteous tale” (302) という様に、哀れな親子の pathos の話<sup>(13)</sup>として PhsT を語っている。父と娘の双方納得した (248) やりとりからは、娘の意向も聞かず、“deeth” か “shame” かの二者択一において、“shame” よりは “deeth” を選ぶという、chastity を守るためには自らの手で娘の死を選ぶことにためらわない (“pitee” を持つとはいえ) cruel なヴィルジニウスの姿 (キリスト教倫理から彼の行為は、正当化されえない)、及び “Blessed be God that I shal dye a mayde!” (248) と言って、父同様 chastity を守るためなら父の意志に従うという (気絶するほどの悲しみを抱きながらも) 父の「監督」の下にあるヴィルジニアのこうした父子の姿は、聴衆の心に pathos を催させるに違いない。語り手もこう嘆く。

Allas, so pitously as she was slayn!

(VI [C], 298)

Myn herte is lost for pitee of this mayde.

(VI [C], 317)

アピウスの非道が焦点であった原典の箇所を、チョーサーは、美貌で美德の乙女の受難が焦点の話に改変し、<sup>(14)</sup> 更に父子への憐れみ、同情を喚起する pathos の要素を PhsT に持ち込んでいるからである。

そもそもアピウスとヴィルジニアの話は、中世においてこうあった。<sup>(15)</sup>

The tale was popular in medieval literature ... and was almost always told as an exemplum of evil government.

聴衆は、この話を聞いた時、“evil government” の exemplum (例話) として

この話があるという認識の下、チャーサーの PhsT との相違を明確にわかった上で耳にした、つまりチャーサーの改変から、チャーサーの pathos をめざす意図をただちに知ったはずである。

結局、ヴィルジニアの死の意味を考えるに、美貌と美德の乙女は、好色な悪裁判官とその仲間たちの企んだ奸計にはまり、不本意にも、父の手によって殺されるという忍耐の受難の姿、pathos を催す憐れな姿を聴衆に見せていると言える。

## 5

次に語り手による最後の“sentence”を吟味する。

Heere may men seen how synne hath his merite.  
Beth war, for no man woot whom God wol smyte  
In no degree, ne in which manere wyse;  
The worm of conscience may agryse  
Of wikked lyf, though it so pryvee be  
That no man woot therof but God and he.  
For be he lewed man, or ellis lered,  
He noot how soone that he shal been afered.  
Therefore I rede yow this conseil take:  
Forsaketh synne, er synne yow forsake.

(VI [C], 277-86)

この語り手の sentence は、PhsT が、受難の乙女の死にまつわる pathos の話であることとそぐわない。Anne Middleton も次の様に指摘する。<sup>(16)</sup>

The Physician's "sentence" fails to acknowledge the pathos generated by the final scene between father and daughter.

特に “Heere may men seen how synne hath his merite” (277), “Forsaketh synne, er synne yow forsake.” (286) とは、まさにアピウスにあてはまることである。<sup>(17)</sup> チョーサーは、PhsT をヴィルジニアに焦点をあてた話に変えているにもかかわらず、語り手は、最後の “sentence” において彼女に言及しない。(少なくとも直接に、明白には)

語り手は、PhsT について、まずヴィルジニアの美貌と美德について(チョーサーの付加) (7~71行)、ついで君主の子女の女家庭教師と親に対して子供の監督責任を説く(チョーサーの付加) (72~104行)。これらを踏まえた上で、乙女と父と悪裁判官の三者の関わり (105~206行)、乙女と父の哀れなやりとり(チョーサーの改変) (207~253行) とアピウスの自殺 (254~276行) へと話を続け、最後に罪を捨てよとの “sentence” で話を終える。

語りの点からみると、女家庭教師と親への警告を言う際(語り手は、「監督」への強い関心を持つ)、ヴィルジニアは、「監督」の必要がない、つまり罪なき存在としてあり、乙女の死に対する憐れさよりは、親の「監督」責任への言及を踏まえた上で、美德のヴィルジニアとは対照的な悪裁判官アピウスの悪事への関心に基づいて、「罪」を捨てよという教訓 (“sentence”) を説くことの方に、語り手は、より強い関心を抱く。そうすると、語り手の「監督」の語りと最後の語りからは、乙女の chastity にまつわる「監督」と「罪」への関心に基づいた語り手の現実的、世俗的な教訓 (sentence) を説く姿勢が見えてくる。<sup>(18)</sup>

聴衆は、下卑た (“ribaudye”) (324) 話ではなく “sentence” の話を欲している (cf. 325)。PhsT の語りが終わった後、*The Pardoner’s Tale* が始まる前に、上品な人々 (“gentils”) は、口々にこう言う。

“Nay, lat hym telle us of no ribaudye!  
Telle us som moral thyng, that we may leere  
Som wit, and thanne wol we gladly heere.”

(VI [C], 324-6)

語り手の最後の sentence は、それなりに説得力を持つ。なぜなら彼の言う「罪」についての考えは、中世において標準的な考えであるし、そもそも *The Canterbury Tales* は、“sentence” と “solace” の語りをめざすわけであるから、語り手によるアピウスの罪の sentence への関心は、語り手として当然のことである。

語り手は、PhsT を Titus Livius (ローマの歴史家) の名を持ち出し (1), *History of Rome* からの話であることを聴衆に思い出させ、次にアピウスの名を出して (154) からこう言う。

(So was his name, for this is no fable,  
But knowen for historial thyng notable;  
The sentence of it sooth is, out of doute),

(VI [C], 155-7)

ここで PhsT が ‘fable’ ではなく、歴史的事実 (“historial<sup>(19)</sup> thyng notable”) であると断わっていることから、ヴィルジニアにまつわる話が、本当の出来事であったことを語り手は、聴衆に印象付けようとしている。

更に verse form の点からみると、PhsT は、couplet form で書かれていることに注目すべきである。Roger Ellis は、couplet form と “reality” との関係をこう指摘する。<sup>(20)</sup>

We find the couplet form used for the overarching pilgrimage narrative more immediate, closer to ‘reality’, than any of the variant forms used in individual tales.

語り手が、PhsT を “historial thing” であると言うことや、語り (narrative) を ‘reality’ に近づける verse form としての couplet form を PhsT が取っていることは、語り手の最後の ‘sentence’ における、「罪」指向の世俗的、現実的な

性格、姿勢と一致している。<sup>(21)</sup>

他方、宿の亭主は、罪の 'sentence' よりも、ヴィルジニアの憐れみを強く示す。

確かに宿の亭主は、語り手が語り終わると、気が違った様に、こう誓言する。

"Harrow!" quod he, "by nayles and by blood!

This was a fals cherl and a fals justise.

As shameful deeth as herte may devyse

Come to thise juges and hire advocatz!

(VI [C], 288-91)

"fals" な裁判官とその仲間が、当然の報いとして (cf. 277), "shameful deeth" を遂げたこと (ヴィルジニアが迫られた "shame" か "deeth" かの二者択一どころか両者共を取る) に対しての、これは宿の亭主の "the worm of conscience" の働きによるものである。

ところが宿の亭主の罪への関心は、ヴィルジニアの哀れな死へと移る (cf. 295-8, 317)。

Algate this sely mayde is slayn, allas!

(VI [C], 292)

This is a pitous tale for to heere.

(VI [C], 302)

But wel I woot thou doost myn herte to erme,

That I almoost have caught a cardynacle.

(VI [C], 312-3)

宿の亭主は、乙女の死に心臓が張り烈けそうなほどの哀れさ (pitee) (317) を感じるが、PhsT が美貌と美德の乙女に焦点をあてた話であり、pathos を持た

らす話であるからこそ、宿の亭主の反応は当然のものである。

結局、語り手のめざすものは何かというと、「罪」についての‘sentence’なのである。pathos の話をしながらも、pathos を指向するのではなく、乙女のchastity をめぐる「監督」と「罪」を指向している。宿の亭主や聴衆が、語り手の語りを聴いて pathos の感情を抱くことと、語り手の語りの指向方向とは必ずしも一致してはいない。

## 6

語り手 The Physician の性格について、human contradictoriness が指摘されている。<sup>(22)</sup> 語り手は、立派な医者 (“a verray, parfit praktisour”) (I [A] 422) であると同時に、聖書に弱く (“His studie was but litel on the Bible”) (I [A] 438)、金銭欲の強い (“For gold in phisik is a cordial, / Therefore he lovede gold in special.”) (I [A] 443-4) 姿を見せる。だからといって、この語り手が、pious でないと速断できないし、彼が hypocrisy の性格を持つとしても、だからといって PhsT の語り手としてふさわしくないと速断もできない。つまり必ずしも pious であるとは言えないし、hypocrite かもしれないような世俗的な人間が、PhsT の語り手と考えてもおかしくはないわけである。

チャーサーは、語り手の性格と話の関係が、常に一致し、語り手がその話にふさわしい、例えばあるモラル (sentence) を説くにふさわしい語り手が、そのモラルの話をするといった、話と語り手の関係が、完全に一致したものを必ずしもめざしているのではなくて、内包する矛盾を提示することにより、聴衆にその矛盾を考えさせると同時に、矛盾を持たせることにより生身の人間の造形をめざしている。矛盾を呈する人間の姿も、現実の世俗の人間の姿である。チャーサーは、*The Second Nun's Tale* の The Second Nun の様な宗教的な語り手だけではなくて、The Physician の様な語り手による話をも書いているのである。

## 注

- (1) PhsT の引用は、すべて Larry D. Benson (ed.), *The Riverside Chaucer*, 3rd ed. (Boston: Houghton Mifflin, 1987) に依る。本文中括弧内の数字は、行数を表す。原典参照は、W. F. Bryan and Germaine Dempster (eds.), *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales* (Atlantic High Lands, N. J.: Humanities Press, 1958) pp. 398-408 に依る。チョーサーは、主に Livius (Livy) の *History of Rome* と the *Roman de la Rose* (ll. 5589-658) を PhsT の原典とする。
- (2) L. D. Benson, p. 902, note to ll. 9-13.
- (3) P. M. Kean, *Chaucer and the Making of English Poetry vol. II: The Art of Narrative* (London: Routledge & Kegan Paul, 1972), p.181.
- (4) “synne” の言葉は、PhsT において 4 回使われている。まずヴィルジニアの chastity との関わりにおいて (138), 後 3 回は、語り手の最後の “sentence” において使われている。ヴィルジニアの語りにおけるこのただ 1 回の現れは、丁度ヴィルジニアの名前が、ただ 1 回現れ、彼女の処女性を極立たせる効果を持つと同様、彼女の chastity を極立たせる効果を持っている。(このことは、批評家の間ではあまり指摘されていないことをここで指摘しておきたい。)
- (5) “false” の epithet の使用回数の違い (アピウス 3 回, クラウディウス 1 回) 及びアピウスに脅されて悪事に加担したこと, これらが, クラウディウスに対するヴィルジニウスの “pitee” と当然関係ある。
- (6) *MED* “pite” 1. (b) :the quality of being compassionate; compassion, kindness; generosity of spirit, charity; also, affection, tenderness; faderes~, paternal love. (初出 a1250, c1390 この箇所引例) Cf. Robert G. Benson, *Medieval Body Language: A Study of the Use of Gesture in Chaucer's Poetry* (*Anglistica* XXI; Copenhagen: Rosenkilde and Bagger, 1980), p. 144 (expressive gestures, which translate emotions into behavior).
- (7) ちなみにアピウスは 7 回 (154, 178, 204, 227, 265, 270, 626), ヴィルジニウスは 7 回 (2, 167, 175, 180, 197, 203, 272), クラウディウスは 3 回 (153, 179, 269) 各々その名前が発せられる。
- (8) Helen Cooper は、中世における “a shame culture” と “a guilt culture” を指摘する。“The Middle Ages combined many features of a shame culture, which sets the highest value on honour and reputation, with a guilt culture, which operates on the principles of an inner conscience.” (Helen Cooper, *Oxford Guides to Chaucer: The Canterbury Tales* [Oxford: Clarendon Press, 1989], p. 253)
- (9) Cf. Robert G. Benson, p. 144.
- (10) L.D. Benson, p. 903, note to l. 240.



- (11) Cf. Robert G. Benson, p.144.
- (12) L. D. Benson, p. 903, note to ll. 207-53. Cf. Helen Cooper, pp. 250, 254.
- (13) Cf. L. D. Benson, p. 14; Helen Cooper, p. 252; Robert Worth Frank, Jr., "The *Canterbury Tales* III: Pathos" in Piero Boitani and Jill Mann (eds.) *The Cambridge Chaucer Companion* (London: Cambridge Univ. Press, 1986), pp. 143, 153; Jill Mann, *Geoffrey Chaucer* (New York: Harvester, 1991), p. 143; Charles Muscatine, *Chaucer and the French Tradition: A Study in Style and Meaning* (Berkeley: Univ. of California Press, 1957), p. 193.
- (14) L.D. Benson, pp. 14, 902.
- (15) *Ibid.*, p. 902.
- (16) Anne Middleton, "The *Physician's Tale* and Love's Martyrs: 'Ensamples More Than Ten' As a Method in the *Canterbury Tales*" *The Chaucer Review* 8 (1973), 16.
- (17) L. D. Benson, p. 903, note to ll. 277-86. 277~286 行は, "standard thinking about sin" を表明している。
- (18) PhsT の語り手の語りについては, 否定的, 批判的な評価を下す批評家は多い。例えば, Donald R. Howard, *The Idea of the Canterbury Tales* (Berkeley: Univ. of California Press, 1978), p. 336 (a hypocrite) ; R. M. Lumiansky, *Of Sondry Folk: The Dramatic Principle in the Canterbury Tales* (Austin: Univ. of Texas Press, 1955), p. 200 (語り手に hypocrisy をみる) ; Derek Pearsall, *The Canterbury Tales* (London: George Allen & Unwin, 1985), p. 278 (the inadequacies of the narrator) .
- (19) *MED* "historial"(a): Belonging to history, authentic, true (初出この箇所引例)
- (20) Roger Ellis, *Patterns of Religious Narrative in the Canterbury Tales* (London: Croom Helm, 1986), p. 222. Cf. "Until now, Chaucer has generally favoured rhyme royal for the religious tales." (*Ibid.*, p. 221)
- (21) Cf. Helen Cooper, p. 249.
- (22) Jill Mann, *Chaucer and Medieval Estates Satire* (Cambridge: The University Press, 1973), pp. 98-9. Cf. Helen Cooper, p. 253.